

## 勉強が大好き



介護老人保健施設 東風の里 翁長 春彦

数ヶ月前、自動車運転免許の更新に行った。

高齢者講習では認知機能、夜間視力、動体視力、視野の検査、運転実技の審査もあり、充実した内容だった。このように、厳しい審査を経てやっと更新できた。

替わって、私のもう一つの国家資格である医師免許は2年に1回厚労省へ届出をするが、審査はない。「医師たる者は生涯にわたり自ら研鑽に努めて知識技能を維持深化せよ」とのことであろう。

ところで、私の出身大学は、一科目でも単位を落とすと留年、次の年は落とした科目だけでなく全科目再履修というルールだった。

おかげで嫌いであった試験が、更に嫌いになった（まあ、「試験が好き」という人はあまりいないと思うが…）。国試が終わり、試験が無くなったとき、私は「試験が無ければ、勉強が実に楽しい物である」ことを発見した。そして勉強が大好きになった。

何故、試験が勉強を嫌いにするのか？それは、私が「興味を持った内容」と出題者が「重要だと思う内容」が必ずしも一致しないことに原因がある。僅かに違うこともあれば、まるで違うこともある。その結果、成績は、違いが無ければ「優」、僅かな違いであれば「可」、全く違えば「不可」になり、「不可」であれば、一年余分に大学で勉強することになる。私は講義の内容を理解するだけでも精一杯だったのに、出題者が「重要と思っていたもの」が解らないことがままあった。

それでも、出題者の気持ちが少しは付度できるようになり、無事卒業できた。

さて、「沖縄県医師会報」には「生涯教育コーナー」がある。県内で活躍されている先生の投稿論文がある。総論的な論文が多いのは分野が違う読者も対象としているからだろう。同じ分野の読者には物足りないかも知れないが、私の知識の「更新」には最適である。

思わず、「へえ」ボタンを連打することも多い。勿論、私の「へえ」の部分と、著者の強調したい部分とは異なることもある（むしろ、異なることのほうが多いかも…）。

私の関心の無かった部分が、コーナー後半の「設問」で問われていれば、そこで、もう一度本文に戻って確認する。学生時代の試験でも、このように知識の再確認が出来ればどんなに良かったことだろう。落とすための試験では無かった筈なので、許可して貰いたかった（これはカンニングではない。知識の再確認なのだ）。これで、私と著者の意見の微調整は終わり、私の知的好奇心は満たされた。

このようにして、今でも試験が大嫌いな、そして、勉強が大好きな私は、「医師として生涯教育を努めた」ことの達成感を持って、「生涯教育コーナー」のページを閉じる。

つまり、試験さえ無ければ、勉強は「楽しく、コストも良く、外聞も良い」理想的な趣味になる。

